

## 本田喜代治「そのもとに帰るべし」

社会学の本質に関して多くの混乱があることは遺憾ながらほんとうである。このような事態に処してわれわれがしなければならないことは、具体的、実践的に問題を確立して、そしてこれを徹底的に追求することである。

それには、われわれが今どのような社会に住んでいるか、その社会はどんなふうに動いているか、そこにある無数の悪の根源は何であるか、それを取り除くためには社会をどのように変革したらよいか、といったようなことを、科学的、合理的にきわめなければならない。そのようにして問題が発見され確立され追求されるならば、社会学とは何ぞやというような問いに答えられなくても、もうそこに社会学は存在する。生きて動いている、と言っていい。

それを仮に、社会学ではない、という人があったとしても、いちばん肝腎の「問題」が確立されているかぎり、そんな名称の問題などは二の次のことではないか？ 社会というものがそもそも何だかわからない、などという人が出てくるならば、われわれはこれを、スコラ的な問題としてでなく、良識の問題としてとりあげれば、そう混乱をひきおこす恐れはないと思う。

混乱を生じたならば、いつでも、そのも<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>に帰るべきだ。も<sup>〇</sup>と<sup>〇</sup>とは実践と良識とである。

(名古屋大学社会学研究室『研究室月報』第1号、1953年11月5日)